校長室だより～燦燦～ №７５４

縁と縁

2023.5.18

人生が動き出すことがある。ここ２年くらいは、そういうこともなかった。コロナに合わせたかのように停止していた。それが、３月くらいから一気に不思議な縁がつながっていった。

人探しで栄養技師さんを探していた。栄養士として活躍している教え子に連絡をとった。畑違いのため、情報が少ない。人の情報が欲しかった。同時に、調理員さんも探していた。別の調理員さんが、いい人がいますと推薦してくれた。有難い。

校長面接というわけでもないが、学校に来ていただいた。いろいろな話をしたが、「高澤先生ですよね」となった。苗字が変わっているため、こちらはわからなかった。旧姓を聞いて、すぐにわかった。ソフトテニス部の教え子だった。

彼女は、２年生のときに転校してきた。ソフトテニス部に入ってきたときは、技術的には、２年生の中で一番下だった。ところがである。あれよあれよという間に上達し、秋の新人大会では、１番手、エースに成長していた。吸収力がすごかった。他の生徒に比べて、私に怒られることも少なかった。

いきさつは忘れたが、私のラケットを彼女に貸していた。それを離任式の日に返してくれた。そのことは、彼女も覚えていた。ただし、私の記憶では、「そのまま使って」と離任式の日に再び貸し出しを延長した。すると、３年生の最後の大会の日に、彼女は私のところにやってきた。そして、丁寧に「今まで、ありがとうございました」とラケットを差し出した。そう記憶しているが、彼女は覚えてはいなかった。

彼女は、私の中では、とてもいい子だった。頭がよく、努力家だった。試合もよかった。相手に向かっていく姿勢を見せていた。彼女は「覚えてくれていたんですか」と驚いていたが、忘れるわけがない。彼女のペアだった生徒は、何の因果か、本校の保護者となっている。息子さんは、ソフトテニス部で活躍中である。そのことを伝えたら、「えっ、会えるんですか」と驚いていた。

もっとすごいことがあった。ラケットを貸していた彼女と、栄養士の彼女は、同じ高校でテニス部の先輩、後輩になったのである。聞けば、昨年、テニスの試合で、高校以来初めて再会したそうである。栄養士の後輩は、先輩をペアとして誘うつもりだったというではないか。

出来すぎのストーリーである。ここまでくると、偶然ではない。二人は、別の中学校出身である。だが、部活動では同じ人間が顧問だった。同じ人から指導を受けている。どちらも厳しい指導だったはずである。今会うと、普通に話せる。昔話に花が咲く。

縁が縁を呼び、縁がつながっていく。そんなに何度も起こることではないが、今までもこういうことはあった。偶然ではなく必然であり、運命のようなものなのだろう。そう考えると、生徒と先生の出会いは大きい。このことを、教え子たちから教えてもらった。感謝である。